

## [課程一 2]

### 審査の結果の要旨

氏名 小池進介

本研究は多チャンネル近赤外線スペクトロスコピー機器を用いて、文字版語流暢性課題中の前頭側頭部血流変化を、精神病発症超危険群、初回エピソード精神病、慢性期統合失調症の各臨床病期に該当する被験者および健常対照者について計測し、血流変化の違いを検討したものであり、下記の結果を得ている。

1. 臨床病期の群間差に注目した検討では、酸素化ヘモグロビン濃度変化の減少パターンが脳領域によって異なることを示した。両側腹外側前頭前野、両側前部側頭皮質、および前頭極前頭前野領域では、臨床病期早期から臨床病期後期と同程度の機能障害を有することを示唆した。一方、両側背外側前頭前野および右腹外側前頭前野領域では、健常対照群 > 精神病発症超危険群 > 初回エピソード精神病群 > 慢性期統合失調症群となる傾向を示した。この結果により、臨床病期を客観的に把握できる指標となる可能性を見出した。
2. 臨床指標との相関では、過去の慢性期統合失調症研究と同様、慢性期統合失調症群において機能の全体的評定尺度得点と前頭極前頭前野領域の酸素化ヘモグロビン濃度変化に正の相関関係を示し、症状把握の客観的指標となることを見出した。

以上、本論文は各臨床病期の前頭側頭部血流変化パターンを検討することで、統合失調症で認められる高次脳機能障害が、どの臨床病期から認められ、どのように変化していくのか明らかにしたものである。本研究は近赤外線スペクトロスコピーを用いて精神病発症前後の精神症状・機能を客観的に計測し、臨床病期を予測しうる客観的指標となる可能性を見出したものであり、学位の授与に値するものと考えられる。